

未来への伝承

170

中世の石硯せきけん

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、夏休みファミリーミュージアムテーマ展「出土品の素材―何からできている?」を開催しています。今回は、ここで展示している市内出土の石でつくられた中世(鎌倉・室町時代)の硯を紹介いたします。

そもそも硯は、文房四宝(筆・墨・硯・紙)の一つとされ、文人墨客が書や画の表現に用いる道具としてだけでなく、その形や色の美、装飾などを愛玩する工芸品でもありました。

中国においては、魏・晋・南北朝時代の頃の硯は円形で陶製のものが主流を占め、隋の時代に長方形の石硯が現れたといわれています。唐に入り、著名な産地から次々と石が採掘されるにつれて、陶製から石製の主流になっていきます。

日本の硯は中国の影響を強く受けており、奈良・平安時代は須恵器製が中心で、平安時代半ばから後半に石製へ移行したと考えられています。この頃、菅原道真が石硯の漢詩を詠むなど、石硯を愛する思想も中国にならって浸透したようです。ま

た、形も円形から漢字の「風」の字形、楕円形、台形、長方形への変化があり、これらは中国で石硯の基本形が確立し、「唐物」として日本に招来して以後、国産の硯が中国産の硯を模倣した経過を反映したものとされています。

日本の古代遺跡で硯が出土する場合、その大部分は公的な施設である官衙遺跡か、寺院などの仏教関連の施設が中心です。一般的な集落から硯はほとんど出土しない傾向があり、貴族、官人、僧侶など社会的に上位の人々が使用したと考えられます。

それに対し、日本の中世遺跡で石硯の出土する事例では、城や館、寺院のほか、都市遺跡、城下町や港町の性格をもつ遺跡と多種多様です。特に京都・博多・鎌倉などの都市遺跡では町屋からも出土することから、中世の石硯は仕事上文房具を必要としていた商人や手工業者にも普及していたと推定されます。

市内の発掘調査で中世の石硯が出土した遺跡は、上高津新町の寄居遺跡と、下高津四丁目の下高津小学校

遺跡の2つです。両例とも平面は長方形で、地下式坑という15世紀から16世紀につくられた地下室の跡から出土しました。前者は墨をためる海の部分は円形で石材は粘板岩製ですが、後者の海は方形で片麻岩製です。特に後者はノミの削り痕をたくさん残しており、製作途中のものかもしれません。一緒に出土した土器や陶磁器から、前者は15世紀、後者は16世紀中頃のものと考えられます。

上高津から下高津にかけては、中世は鎌倉街道が近くを通り、裕福な人々「富有^{ふゆう}人」もいた記録がみられるなど、交通の要衝で拠点となる集落があった可能性が想定されます。両遺跡からは天目茶碗などの茶道具や、中国産の高級な陶磁器も出土していることから、硯が出土することもうなずけます。

今回紹介した石硯は、8月29日(日)まで展示中です。ぜひご覧ください。

☎上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎0826・7111)



右：上高津新町
寄居遺跡出土 15世紀
左：下高津四丁目
下高津小学校遺跡出土
16世紀中頃